

「実践記録」

小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求

—ICTなどを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に—

元田美智子^{*1}・松野絵理^{*1}・修行祐子^{*1}

高木留美子^{*1}・宮地哲史^{*1}・近藤真紀^{*1}・朝長久美子^{*1}

井口均^{*2}・小西祐馬^{*2}

※1 附属幼稚園 ※2 教育学部

1 はじめに

本研究は、2011年度に始まった長崎大学教育学部教員と附属幼稚園教員との共同研究について、主に2012年度の成果をまとめたものである。

2005年に発表された中教審答申の中に今後の幼児教育のあり方として「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」が求められるとある。「学びの重要性」「発達の連続性」を強調していることがうかがえるがこの「学び」「発達の連続性」という言葉を学力向上の視点を重視し、小学校や中学校との一貫性をもたせるという意味でとらえると、「幼児教育は就学に向けての準備としての教育」と位置付けてしまう危険性がある。しかし、2001年のOECD報告書には、「幼児期は人生最初のステップとして極めて重要な意義をもつ」「それ自体が重要な意味をもつ人生最大の段階である」とある。これは、幼児期という発達段階の独自性重視を強調したものであり、しかもその時期特有の生活活動を充実させる中で子どもは様々なことを学ぶことができるという保育観を示した。各段階の発達の独自性を十分達成していくことが、結果として次のステップへの準備や連続性をもたらし、子どものより豊かな未来につながるということ考えを指し示したのである。

また、文科省が行った全国学力調査やOECDの学力テストの結果では「日本の子どもたちの知識面は満足のいくものとする反面、思考力や表現力、その活用能力においては劣っている。また、学習意欲についても低い」という問題点が明らかになったとされている。知識は様々な方法で注入できる。しかし、生きる力の育成を考えた場合、知識や技能をいくら多く記憶できていても、それを使って子ども自身がどんな目的を達成しようとしているのか。その際にぶつかる問題解決にどのように活かされているのか。自分の考えが第三者に伝わるようにそれらを使って表現したり、創造したりする力と繋がっているのか。もしそうでないとしたら、知識や技能を例え多く身に付けたとしても、学びとしての意味はとて限られたものとなってくるのではないかと本研究では捉えている。

本研究の立場は、幼児期の学びを「生涯にわたる学習能力の基礎を培うこと」と捉え、その学習能力の基礎とは、自由遊びを中心とした保育活動や日常生活の

中で、子どもたちが友達や保育者とかかわり合いながら好きな遊びに没頭し、様々なことを考え、モノや他者と意欲的にかかわることで学んでいくものだと考えている。となれば一層重要なことは、それらの力を個人的に又は仲間関係の中で育てていく為に、現在の状態や形成過程を具体的に評価する手法を明確にすることであろう。本研究で用いる評価方法は、「テ・ファリキ」を参考にした観察記録・分析の方法であり、幼児期に関心・意欲・自発性を高めていくことにつながるだけでなく、同時に保育者自身が子どもに対する多様な理解を深め、子どもとの多様なかかわり方をもたらす点で、必要かつ有効な方法だと感じている。

そこで本園では、昨年度から研究テーマを

「小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求～ICTなどを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に」とし、研究を継続している。

昨年度の課題として、『幼児期の観察記録の分析』『記録方法の改善』『幼児期と児童期の学びの接続についての検証』の3点が挙げられた。そこで今年度は、

- ・多様な記録分析の蓄積
- ・観察記録の継続
- ・記録方法の改善
- ・幼児期と児童期の学びの接続についての検証
- ・本研究の成果の活用

とこの5点について取り組むこととした。

附属幼稚園での研究会は毎週水曜日に実施し、長崎大学との共同研究を今年度は4回実施した。

2 附属幼稚園における今年度の取組

(1) 記録方法について～共通理解と方法の改善

子どもや遊びや行動を細かく観察記録し、分析すること…そして、教職員皆で語り合うこと…これは、どの幼稚園や保育園（所）等でも当たり前のように行われていることだと思う。本園も例外ではなく、昨年度の研究を通して自分の保育について他の教職員と語り合うことが一人の子どもを多様的に捉えることへとつながることがわかった。そこで今年度も教職員が皆、子どもを「良さの視点」で見つめ保育にあたってきた。子どもの学びの視点についても昨年度から参考としているニュージーランドのテ・ファリキを原理とする「学びの物語」における5観点を参考に焦点化した。これは、保育中のエピソードから子どもを見取る際に、「幼児の関心や興味」「熱中する姿」「直面している困難に立ち向かう姿」「自分の考えや気持ちを表現する姿」「他児または他者の立場から物事を見ようとする姿」の5つの観点をできるだけ捉えながら子どもの育ちを見つめていくというものである。今年度は各担任が抽出児について事例を書く際にこの観点を意識しながら記録を振り返ることを共通理解した。さらに今年度は記録方法を改善した。

その策として、昨年度以上に ICT 活用を意識した。普段の保育の様子を写真・動画で記録し、情報交換会や事例検討を行う保育カンファレンスに生かしている。特に動画については活字や会話で伝える以上に子どもの姿を正確に捉えることができるとともに、気になる場面については繰り返し視聴しながら話し合いを深めることができるようになった。本園では各クラスの担任が研究保育をし、保育や子どもの様子を他の教職員とともに見つめ合う研修の場を設けている。動画を視聴する際には、子どもの表情や身体の動き、また、目の動きなど細かいところまで観察することができる。注目すべき所は静止画にしたり、再度見直したりするなどしながらカンファレンスを進めている。記録方法の改善策のもう一つとして研究保育の記録がある。指導案については従来のもを簡素化した。各担任が抽出した子どもを担任がどう捉えているか教職員で共通理解している 5 観点ごとに分析し記入した。そうすることで何を重点的に観察すべきか、またその子どもが現在どのような姿なのかということを理解することにつながったものと考えている。環境構成についても指導案を作成した時点での担任の思いや注意事項なども観察する時にわかるよう詳しく明記した。さらに、観察児の記録にも改善を加えた。今までは時間の流れに対する抽出児の言動を詳しくメモするようしていたが、今年度はそれに加え、環境構成図の中に抽出児の動きを動線で表した。その結果、子どもの動きが一見してわかるようになったと同時に、環境構成のあり方を保育者がじっくりと省察できるようになった。この 2 点の改善策を加えたことでよりきめ細やかな保育記録を蓄積することができるようになったと考えている。

(2) 多様な記録分析の蓄積

例として 3 歳児 A 男の記録を挙げる。

3 歳児事例 事例 1 イメージをひろげて 7 月 5 日

腕に①黒いビニールテープを自分ではさみで切ってつけた A 男。ヒーローになりたい様子。そのテープに向かって何やらつぶやく。②名札をつけようとしたが、やめる。
友達がステージを出そうとすると手伝おうとする A 男。A 男もステージに上がり歌う。
外に出て遊び始める。滑り台に乗って叫ぶ。③滑り台を船に見立てている。
A 男「東京、行くよ～」 「船に乗っていく」 「船が出発する時にはブーッて言うよ」
「出発する時は汽笛っていって、ブーッていうのは発車って意味だからもう、行っちゃうよ～」
他の子どもたちも仲間に入る。しかし、A 男のイメージが伝わらない。

A 男「東京行くけど行く？」 「I 子ちゃん、行く？」
「ブーンって行っちゃうよ。出発しちゃうよ。G 男君、行っちゃうよ」
A 男「I 君、行っちゃうよ～」 (何度も言葉をかける)
I 男 「いいよお」
④その後、保育者に滑り台が船になったことを伝えに来た。

A 男「船に乗って、ディズニーリゾートに行く。僕は早く行きたいから飛行機で行く」
 ①そう言って今度は、バネシーソーを飛行機に見立てる。

A 男「もう、着いたよ」
 と言う。
 イメージは広がり、次はディズニーリゾートに着いたと、地図を広げだす A 男。
 地図を広げ、いろいろなアトラクションをめぐって遊ぶ。目的地に着くたびに地図を広げて、次はどこに行こうかと B 男と相談する。
 ディズニーリゾートでお昼御飯を食べることになり、レストランに入る A 男。
 料理を作ろうとした時、保育者が先ほど A 男が見立てた船に乗ろうとしていたが乗れない様子を見て、
 T 「待ってください。乗せてくださいーい。おぼれたあ」
 A 男「はいっ、浮き輪」
 と、走り寄ってきて浮き輪を差し出すまねをする。
 もものレストランでは、他の子どもたちがパーティを開いている。
 ケーキを見つけて、
 A 男「ころそく作ろう」
 そう言うが、自分では作らない。砂に触ろうとしない。
 遊びの中で友達が言ったことやしたことについてよく聞いたり、見たりしている。

G 男「先生、虫です！怖い虫です！」
 A 男「とんぼやろ」
 E 子「先生、食べてください」
 A 男「じっと見ている。」
 G 男「服にかかった！（砂が）」
 A 男「パンパンしてやろうか？」

保育者の振り返り

A 男が遊びを楽しむ姿、遊び込む姿をなかなか観察できずにいた。そのため、他の保育者に観察してもらうことにした。

この日の A 男は、遊具を船や飛行機、うめの庭をディズニーランドにとイメージを広げながら遊んでいた。しかし、今日はそのイメージを自分で友達に伝えようとしていた（『自分の考えや気持ちを表現する姿』）。これまでは、自分のイメージを保育者や近くの友達に伝えることはあっても「東京、行くよ～」等と大きな声で友達に言うことはなかった。

保育カンファレンス

- 〈A 教諭より〉
- ① 自分のしたい遊びが明確にある。乗り物ごっこが好きなのではないか。
 →環境構成の中に乗り物ごっこのできる場があっても良いのでは…。
 - ② 保育者のことをよく見ている。遊びに入り込んでいても、保育者や友達の動き

をよく見ている。

→保育者や友達と遊びたいという思いの表れか…。

〈B 教諭より〉

③自分ではさみで切ってつけたビニールテープ。よほどヒーローになりたかったのか。

④自分の好きなヒーローの名札が見つからなかったようだ。果たして何のヒーローになりたかったのか。自分のイメージに合った名札があったなら、どう動いていたのだろうと思う。

⑤自分のイメージを友達に伝えるが、伝わらないとわかると時間をおいてでも保育者にその都度伝えていた。

→保育者とのつながりを感じた。

⑥砂や泥など汚れる物に対して汚れるからいやだというこだわりがなくなったら、もっと、自分で作ったり、自分で～したりと自分なりの遊びを楽しむことができるのかもしれない。

〈他教諭より〉

・黒＝母親であり、象徴である。母親のことが大好きなA男。だから、母親から言われたことを守ろうとするA男なのではないか。

・母親の言葉＝呪文…だから、空想の世界では自由なA男。

〈H学部教員より〉

A男の遊びの本命は「ヒーローごっこ」なのではないかという気がしている。母親からの「お兄さんらしく」に対置される遊びが、何人かを引き連れてのごっこ遊び。でも、これは本心から遊びたくてやっているのではないかもしれない。親の期待を背に受け、けなげに「お兄さんらしく」振る舞い、周囲に認めて欲しい仮の姿かも。そんな「いい子ちゃん」的な自分だけでなく、ヒーローになって思い切り暴れてみたい、力を誇示したいのでは…。

でも、お母さんの「あなたは、うめ組の中で一番お兄ちゃんなのよ」「お兄ちゃんみんなを守ってあげなくちゃ」という「呪文」が強く効いていて、今ひとつヒーローになりきれしていないのかもしれない。「お兄さんらしく」乱暴もダメ、汚したらダメの「呪文」に縛られて…「呪文」との葛藤（＝母との葛藤）は、お母さんの絵にはっきり出ているように思う。それと葛藤しつつ、「お兄さんらしい」姿と「ヒーロー」の姿を同時に見せている。今のところ、前者の方が優位に出現し、「お兄さんらしく」振る舞っていることに、それなりに自負も感じているA男。

汚れた食器などをきれいにすることなどは、汚れを取り去ったことで評価されている。それを、他者に認めてもらおうとした姿がもつ意味は、汚れる・汚す事への親近感より、汚れを落とした事への賛同である。その意味では、自分が汚す・汚れることなどへのハードルはあまり下がっていないのかもしれない。しかも、

「お兄さんらしく」を押しつけられることには強い怒りに近い感情も感じる。母の絵にその怒りを発散し、うつぶんを晴らしている。それを乗り越え、本来の自分らしい「別な姿」で「お兄さんらしさ」を発揮したいストーリー作りの途中ではないか。その一つの打開策が、彼が興味・関心と憧れを抱いている「ヒーロー」なのでは？「ヒーロー」になりきった自分の姿も母親に認めて欲しい。強くて、いろんな事ができ、もしかしたら悪者を懲らしめる、頼もしい自分をより認めて欲しいのではないのだろうか。

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

保育カンファレンスを基に環境構成について次のように考えていく。

- ・ A男は心の開放のできる遊びが必要。泥や水にまみれて遊んでも母親に注意されないように保育者が配慮していく必要がある。
- ・ バランスのとれた育て方とは何か、規制をすることがA男の行動までも規制することになっていないか等について、母親と共に考える必要があるのではないだろうか。一生懸命に育てようとしている母親だからこそ、子どもを自分の思う通りに育てて欲しいと理想のルールに敷こうとしているのではないか。それが、ひずみになっていかないよう、心と身体が開放されるような遊びを幼稚園することにより、補充をしていくことが必要だ。

このように保育者の振り返りに加え、他の教職員とこの事例についてカンファレンスを行い、それを基にしながら保育者自身が今後の子どもへの対応や保育のあり方、さらに環境構成について検討していくという流れで保育に向かった。やはり、保育者一人が捉える子どもの姿はほんの一部であり、カンファレンスを行い様々な意見を聞くと子どもの多様な良さを改めて知ることとなった。また、昨年度に引き続き、長崎大学教育学部の井口先生、小西先生と協同で研究を進めてきた。



〈ICTを使って長崎大学井口・小西両先生とのカンファレンス〉

教職員だけでは導き出すことのできない子どもたちの心の奥深くにあるもの、例えば母親との関係性になどについても語り合う中で、子ども理解の難しさを痛感すると共に、自分の保育を省察するよい機会となった。

(3) 昨年度からの観察記録の継続～2つの視点から子どもを観察して

本研究は昨年度からの継続であることは先述しているが、子どもを観察し、記録をとる際に各クラスの担任が1名～2名、観察児を抽出している。昨年度、各担任が選んだ子どもは、どんな子どもなのか？と気になっている子ども、自分で遊ぶことができない子ども、乱暴な子ども、友達とうまくかかわることのできない子ども等であった。どちらかという担任が否定的に見がちであった子どもであったように思う。今年度もこれは引き続き観察児を選ぶ時に念頭に置きつつ、新たに次のようなことも考え合わせることにした。

- ・昨年度の抽出児を学年・担任は替わっているが続けて観察・記録・分析していく。
- ・遊びを通して自ら学びを深めていこうとする子どもを観察・記録・分析していく。

昨年度抽出児であった子どもは担任が替わった現在も引き続き観察をし、記録分析を継続した。今年度、継続して記録をとった子どもは4名、また昨年度年長児だった子どもは小学校へ進学しているがその中で1名を追跡して調査している。

遊びを通して自ら学びを深めていこうとする子どもについて5歳児ふじ組D男の事例を挙げる。

この研究を通して子どもを良さの視点で捉えることで子どもを理解しようと努め、その結果、適切な援助・環境構成を考えることができるようになってきた。その一方ですでに生き生きと主体的に学んでいる子どもに対しては、保育者が良さの視点で見ようと意識しなくても肯定的に見ていくことは容易なことであった。そのため、保育者の援助はというと、見守り・認める方法が主となっていた。そこで、この子どもたちについても記録・観察・分析をすれば更に理解が深まり、援助の方法を探れるのではないかと思いD男の記録をとることにした。

5歳児事例 事例4-① 家で考えてきたんだけど 9月21日

ふじ組でつくった遊園地の名前について話し合った。

〈1日目〉

「①ふじ組遊園地」「②ふじ組ランド」「③みんな遊園地」「④ふじ組みんな遊園地」など出てきた。自分が選んだ名前に挙手をしていく中で、「③みんな遊園地」が少なかったので「消したら？」と言う案に賛成の子どもが多かったので消すと、提案者のB男が泣き出した。F男「こういうことは、ゆっくり決めないといけないんだよ。」話し合いは、明日に持ち越した。

〈2日目〉

J男が、「選んだ所にネームプレートを動かす」と提案した。みんながネームプレートを各自が決めたところに動かすと一目瞭然、「①ふじ組遊園地」が一番

多かった。それでもB男とK男は、思い入れが強く③から動かさなかった。この日も決まらない。保育者は「明日には、遊園地を開きたいね。」と言って明日も話し合いをするように伝えた。

〈3日目〉

朝から保育室に入ってきて保育者と目が合うと、

D男「家で考えてきたんだけど、じゃんけんして勝った人から、今日はふじ組遊園地、次はふじ組ランド、次はみんな遊園地ってしたら？」

T「うわあ、D男くん、家でも考えてきたの？すごい。いい考えだね。話し合いの時にみんなに言ってごらん」

9:00 話し合いの時間になり、D男が提案すると、

C男「(遊園地の名前が日によって) 変わったら、わからなくなる」
ざわざわとなる。

T「ネームプレートを変えていいよ」と言うと②ふじ組ランドを選んでいたE男が①に置き換えた。意見は二つにしばられた。

B男「ふじ組みんな遊園地でいい」すっくと立ち、きっぱりと言った。

C男「長い」ざわざわ・・・

T「ふじ組みんな遊園地でいいですか」賛成の子どもがほとんどであり、決める事にした。名前が決まり、準備が始まった。入り口の門にはふじ組みんな遊園地と書いた。

9:50 から遊園地ごっこが始まり、お客さんを呼んだ。

D男は、B男、C男と一緒にくじ引きをつくり、商品のはねるカエルを大急ぎで折り紙で7匹ほどつくってお店を開いた。年少さんや年中さんが遊びに来てくれた。子どもたちははりきってお店屋さんになり、遊園地ごっこを楽しんだ。

弁当後のおなかやすめの時、保育者が本を読んでいるD男の隣にくっついて

T「ねえ、やっと決まったね」

D男「二つになったからB男くんが譲ったんじゃない？」

保育者の振り返り

これまでも難問題を解決しようと考え考え、アイデアを提案してきたD男。遊園地の名前がなかなか決まらず、遊園地が開けない困った状況になる。子どもたちは何とかみんなが納得するような妙案を考え、真剣な話し合いが続いていた。家であれこれ思案していたのであろう。何とかして名前を決めたい気持ち。みんなが全員納得するアイデアはないかと考えていた気持ち。みんなへの愛を感じるD男であった。D男は、友達からの期待感も感じていたのであろう。子ども同士の信頼関係の深さに感動した保育者であった。

更に、D男はB男の気持ちを推察した。B男は、自分の意見を消されて泣いたが、最後は譲ったそのこともD男は認めた。友達に対する深い思いを感じた。この話し合いを通して子どもたちの心の中にふじ組の一員である喜びが芽生えていること、仲間を思いやる気持ちが育っていること、みんなで協力しようという連

帯感が生まれていることを感じた（5 観点でいうと『困難に立ち向かう姿』『自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する姿』『他の人の立場から物事を見ようとする姿』）。

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

- ・みんなで協同して遊ぶ経験をする。
- ・話し合いを適宜行い、互いの考えや気持ちを率直に出し合うようにする。

この事例では、遊園地の名前を自分たちで自分たちが納得できるように決めていった。子どもたちは時間をかけて話し合いをする中で、友達の考えをしっかりと聞くこと、皆が納得するような良い案を考えることなど主体的にかつ積極的に取り組む経験をした。意欲的に遊びを探求する態度を育むためには次のような援助が有効なのではないかということに気付いた。

- ・十分に遊びの時間を確保する。

事例 4-①から分かるように保育者がすぐに結論に導くのではなく、皆を納得させるようなもっと良い方法はないかと子どもが自ら葛藤する時間を十分に確保することの大切さを感じた。

- ・友達とのかかわりをもつ機会を意識的につくる。

事例 4-①のように話し合いの場を意識的につくることで友達の様々な考えを知る機会を得ることができた。また、自分の考えに対する友達の反応も分かる。このような経験を通してこんな自分になりたいという自己像を作っていくのではないかと考える。

一方で課題も見つかった。長崎くんちに出たD男は幼稚園で始まったおまつりごっこでも意欲的に活動するのではないかと保育者は予想していた。しかし、いつも生き生きと遊ぶD男の姿とは異なる姿を保育者は観察の中で捉えた。

5 歳児事例 事例 4-② でもまだ完成してないの 10 月 12 日

長崎くんちのオランダ小船の根曳きで参加したD男。3 か月間厳しい練習をし、くんちの 3 日間は多くの人たちからの歓声を浴びたそうである（父からの話）。翌日話を聞くと「楽しかった」と話したD男であった。くんち明けの3日目。オランダ小船を作り始めた。

D男「まだ、完成してないんだ」

H男「絵の具で塗るの」絵の具を持ってくる。

D男「でも完成してないの」「ひも」ひもを取ってくる。

H男「これ何だと思う？オランダ船！楽しいよね。でもできあがってからも楽しいよね」

D男は、ひもをもったまま考えていたが、ひもを置いてダンボールを取ってくる。

H男「もってきたよ～」自分でつくったオランダの旗を持ってくる。

K男「ハイハイが見えたらかわいいかな？恥ずかしい？」K男とH男が二人でガムテープを使って空き缶の文字を隠す。D男は、船の先端を作り取り付ける。H男とK男は旗を取り付けるのに一生懸命。その横でダンボールを切り出す。

H男「かっこいいねえ、できあがりを楽しみだ」と言って日本の旗をつけていると、D男「ゆるくしないようにね」ホワイトボードをちらっと見てダンボールの二つ目を取り付ける。また、切るが、ぼいと捨てる。

T「さあどこまでできた？絵の具使えるよ。コンミ，シャーレだっけ？」

D男「コンミ，シャーレ！」力強く。

T「絵の具塗る？」

D男「うん塗る」

H男「道をあけてくださ〜い。出発します。」

みんなで「コンミ，シャーレ」

K男「階段に気をつけろ」

D男「でもひもがさ・・・」テラスに船を運び、絵の具を5人でぬる。

保育者の振り返り

D男のイメージした船とH男，K男がイメージした船とはずれがあったようで、作っているものの、表情が今ひとつ。自分が曳いた本物のオランダ小船と比べて、「もっと重い」とつぶやいていた。「船の色は黄色」と思いの通りに塗った。満足げなH男，K男とは違って、塗り終わったら、すぐに他のところへ行った。自分が本物のオランダ船を曳いたから、自分が作らなければならないという思いから作っていたのだろうか。龍踊りの友達の方へ行くが、玉を持ってないと分かって走って砂場の横に行った。そして、B男，C子たちの泥団子作りにさっと入り、巧みな手つきで丸め、どンドン玉を形作っていった。何度も何度もさら砂をかけ、手で磨いていた。笑顔があふれていた。

次の週の月曜日、担任不在のため年長みんなで外遊びをした。次の日、部屋の中では龍やオランダ船作りで盛り上がっていたが、D男は泥団子を作って遊んだ。その次の日も砂遊びをした。木曜日、一緒にオランダ小船を作った仲間たちが船を曳こうとしてはちまきをすると、「采ふりをする」と言い、采を作った。そして、友達のはちまきをかっこよく結んだ。自分が大人からしてもらっていたのであろう。今度は、先輩として船を回そうと考えているのか。みんなで秋祭りをすることになり、何の出し物に出たいか希望を聞くと、D男は、「オランダ船とオランダ小船の采ふりをしたい」と言った。

泥遊びを一番したいが、オランダ船を曳くのであれば自分もしたい。だって自分がオランダ船に一番詳しいのだから・・・そんな気持ちがあったのではないか。友達に船の回し方を教え、思いのままに友達が船を回すことができることを、D男は思い描いているのであろうか（5 観点でいうと『他の人の立場から物事を見ようとする姿』）。

保育カンファレンス

〈1回目 10月12日〉

①いつもの勢いがなかった。ふらふらしていた。ひものことを気にしていた。次の援助の工夫が必要であろう（ひもをどうしたいのか尋ねる、船の重さを変えてみる等）。

保育者がひもをなんとかしたかった気持ちを受け止め、援助する必要があった。

②D男は本当は何をしたかったのか。泥団子を作りたかったのではないか。父の話では練習・本番と厳しい指導があり、疲れていたのではないか。今日も疲れていたのかもしれない。くunchから開放されたかったのではないか。砂・泥遊びで癒されたかったのではないか。

③ビデオでの振り返りでは、砂場に走っていく、何度もさら砂をかけ手で磨く、笑顔が見られた。想像すると、やはり泥団子作りをしたかったのであろう。どうしてオランダ小船を作ったのか。友達からの期待から、作ったのであろう。自分が好きな遊びをしたい気持ちと友達の期待に応えたい気持ちの両方があり、D男は葛藤していたのではないか。このあと要観察。

〈2回目 10月24日〉

①父からの話「くunchでじいちゃんたちによく怒られた」。今、くunchはこりごりなのだろう。幼稚園の秋祭りに向けての遊びの中で、保育者がD男をおまつりごっこをしようと責め立てなかったのがよかった。泥遊びを十分したかったと思う。

采ふりへのあこがれの気持ちが育っており、秋祭りをするなら采ふりをしたかったのであろう。

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

一週間後の秋祭りの日、お客様を迎えてみんなでおくunchごっこをして遊ぶ予定である。D男の活躍を楽しみに見守りたい。

保育カンファレンスを受けて注意深くD男の観察を継続した。その後も泥団子を作り続けていたD男の様子を見て、保育者はD男はやはり泥団子を作りたかったのだらうと感じていた。

おくunchが終わってから、砂・泥遊びに夢中なD男。その6日後、D男はおまつりごっこで「采ふり」をしたいと言い出す。

秋祭り当日、たくさんの保護者が見守る中、笛を吹いて采ふり（船の誘導）をした。

D男が自分から采ふりをしたいと言い、楽しそうに遊んだ秋祭りだったと保育者は思っていた。しかし、その翌日、D男の言葉から保育者が思っていたこととは大きく違っていたことを思い知らされた。秋祭りの絵を描き終えてD男は、「『采ふりをして』って言われたの」と保育者に言ったのである。「本当は何をしたかったの？」という保育者の問いに「（船を）押したかった」と答えるD男。この

事例 4-②を通してD男の思いと保育者の予想との間に大きなずれが生じていることに驚かされることとなった。

【D男の思いと保育者の予想のずれ】

D男の思い	保育者の予想
〈1日目〉 泥団子を作りたい	船を作りたいのでは？
〈6日後〉 泥団子を作りたい	采ふりをしたいのでは？
〈12日後〉 船を押したい	采ふりをしたいのでは？

D男はこれをしたという自分の目的からの行動でなく、親の期待に添う自分になろうという目的のために自分の気持ちを抑えていたのではないかと保育者は分析した。子どもの心は日々刻々と変化するものでありその気持ちに保育者が寄り添えなかったこと、子どもの心の奥まで理解することはやはり難しいことを感じた事例となった。そこで、子どもの気持ちを理解するためには、

- ・子どもの一つの行動からこんな目的があるのかも・・・と決めつけない
- ・この子どもはこんな傾向の子どもだとひとくくりで見ない
- ・子どもの心の奥深くまではわかるはずもないが、分かろうと努めようとする

以上を念頭に置き、今後の観察・記録の課題として、

- ・生き生きと遊ぶ子どもも心の中は葛藤しているので細かく行うようにする
- ・その子の遊びが目的に到達していく過程をつぶさに行う
- ・子どもは日々刻々と変化していることを基に継続して行う

という方針が明らかになった。

3 附属幼稚園卒園観察児の附属小学校1年における教育活動の観察

○幼児期と児童期の学びについての検証～H子の事例を通して

昨年度年長児だった子どもが小学校へ進学した現在、どのように小学校の学習に取り組んでいるのかを観察・記録している。このことについて附属小学校安部校長先生、諸先生方にも御理解、御協力いただき、小学校の授業を参観し、幼稚園で身に付けたであろう学習意欲の基礎がどう小学校へとつながっているのかということを観察・記録・分析できたことで昨年度の研究から一歩前進したのではないかと自負している。H子の年中・年長児のときの記録に加え、小学校への学習の取組を5観点にそって記録している。

○H子の小学校での記録（国語・生活科）

小学校事例記入用紙：テーマ「H子の様子（朝の会・国語『おむすびころりん』）」

子どもの名前・・・H子（幼稚園 年長時は ふじ組）

日時・・・平成24年6月29日（金）

観察者・・・○○

ポイント	とらえ方	観察記録
関心は何に！	話題，活動，役割，仲間，現象，事物など，何かに関心を向けているとき	・朝の会では司会の役であったが，大きな声で会を進行したり，挙手をする友達を指名したりした。会の進行はあらかじめ決まった台詞のようだったが，大きな声で自信をもって皆の前で進行する姿があった。国語の授業中も教師の話をよく聞き，板書を写したり，定規を用いて線を引いたりしていた。
熱中してる！	一定の時間をかけて，注意を持続させ，心地よさを感じている時	・文中のおじいさんやねずみの様子や気持ちを読み取り，線を引く作業の際には，10分という長い時間ではあったが，物語を何度も読み返し自分なりに読み取ろうとしていた。
困難に立ち向かう！	難しい課題を自らに課し，問題解決のために工夫を凝らしている時	・友達の意見と自分の考えを比較し，わからないことは挙手をして尋ねて納得しようとしたり，逆に友達から質問され得ると自分なりに回答しようとしたりした。
自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する！	言葉，動作，音楽，造形，文字，数，お話などで表現している時	・読み取ったおじいさんやねずみの様子や気持ちを表現しようとして何度も大きな声で音読していた。
他の人（児）の立場から物事を見ようとする！	他の人（児）との話しや想像上の出来事で，公平さ，助け合い，クラス全体の生活を守る，誇りある態度など応答で示す時	・朝の会の中で皆で円陣を組み，歌う場面があったが，友達と笑い合い肩を組んで大きな声で歌っていた。 ・友達が意見を発表する時には，体を発表者に向けて話を聞こうとした。また，友達の発言に対して，意見を言おうと何回も挙手をする姿が見られた。
<p><u>短期の振り返り</u>：友達の発表に対して意見を言うなど，年長児のH子に対してもっていたイメージとは違う姿があった。教師や友達の話をきちんと聞き，授業に積極的に取り組もうとする意欲が感じられた。担任教師が机間指導の際にH子を認める場面があった。とても嬉しそうな姿であった。</p> <p>年長組の時のH子の『学びの物語』に次のような一節がある。「担任が，自信をもって取り組むH子の姿が見たいとH子に対する見方を変えただけで今まで見えなかった姿が見えるようになってきた」「H子を温かく見守りながらH子の成長を楽しみたい」「心地よい経験を多く積ませたい」このように担任がH子のよさを見取り，温かく見守り続けたことが，H子に自信をもたせ，小学校の今の姿に結びついていることを目の当たりにして嬉しく思った。</p>		

小学校 事例記入用紙：テーマ「H子の様子（生活科 「水鉄砲を作ろう）」

子どもの名前・・・H子（幼稚園 年長時は ふじ組）

日時・・・平成24年7月18日（水）

観察者・・・〇〇

ポイント	とらえ方	観察記録
関心は何に！	話題，活動，役割，仲間，現象，事物など，何かに関心を向けているとき	・水がよくとぶ水鉄砲を作ろうと時間を惜しんで試行錯誤していた。
熱中してる！	一定の時間をかけて，注意を持続させ，心地よさを感じている時	・自分の思うイメージの水鉄砲を作ろうと必死の様子。きりを使いペットボトルの底に穴をあけたい。Tに言われたとおり，ふたの部分をテーブルに付け，きりで穴をあけようとしている。Tに手伝ってもらい，穴があき，とても嬉しそう。なかなか思うように水がとばない。試行錯誤している。材料箱の中から自分がイメージした物を探そうと必死。片方の入れ物にないと思うと次の箱まで素早く動く。
困難に立ち向かう！	難しい課題を自らに課し，問題解決のために工夫を凝らしている時	・なかなか思うように水がとばない。他の子どもたちのようにペットボトルの口の方からとばそうと思っている様子。でも，ふたに穴を開けるのは難しいと考え（体験した）ガムテープにする。
自分の考えや気持ちや気持ちは様々な方法で表現する！	言葉，動作，音楽，造形，文字，数，お話などで表現している時	・T「どうする？」H子「ガムテープに変えろ！（キャップでは）穴があげにくいけん！」自分の思いを自分の言葉で表現しようとしている。水を汲み，とばしてみるなど移動が伴う時はすべて小走り状態。したいという強い思いがある。
他の人（児）の立場から物事を見ようとする！	他の人（児）との話しや想像上の出来事で，公平さ，助け合い，クラス全体の生活を守る，誇りある態度など応答で示す時	・最初，他の子どもと違い，底の方から水をとばそうと思ったのかペットボトルの底に穴をあけようと苦勞していた。その後，うまく水がとばなかったようで，次は多くの子どもたちのようにペットボトルの口の部分から水をとばそうと思った様子。友達の発表の時もあまり聞いておらず，作っている時も自分のことに一生懸命で人を気にしている様子は見えなかったが，周りの様子も見ていたのかその後の活動の際には，口の部分に穴を開けて水をとばすと言う。
<p>短期の振り返り：4時間目の授業だった。集中力も時々切れて途中の今の状況を発表する時など自分の水鉄砲の穴の中から周りをのぞいていたり，あくびをしたり，周りの発表を聞いて，自分の水鉄砲に生かそうという思いは見られない。しかし，途中の話し合いの後，水鉄砲を作り直す活動が始まると，時間を惜しむかのように小走りに動き出す。また，これまでの自分が作ろうとしていたイメージと違い，周りの子どもの作った物に近づけようとしている。自分のペースで水鉄砲を作っていたようだが，その時も周りをよく見ていたということかもしれない。活動を通して，活動の中</p>		

で学んでいくのかもしれない。幼稚園の遊び中で思う存分じっくりと試行錯誤しながら活動できる時間がH子の学びを支えたのかもしれないと思う。

H子のみならず他の子どもにとっても幼児期の学びが好きな遊びに没頭しながら意欲的に身に付いているのかについて、小学校へ参観させていただきながら観察・記録の継続を通して分析していこうと考えている。

4 研究の成果

この研究に取り組み始めてから、私達教職員の子どもに対する見方が変化してきたように思う。研究を通して教職員が感じたこととして、以下が挙げられる。

- ・人格形成の資質を培うという幼児教育の本来の意味を実感することができた。
- ・子どもの気になる面があっても、そうすること、そこに至った思いは何なのかと考えるようになった自分がいる。
- ・一見すると問題だと捉えがちな子どもの行動の真意を汲み取ろうとより努めるようになった自分がいた。そうすることで、自分自身の心に余裕が生まれた。子どもも伸びやかになったような気がする。
- ・子どもの良さを見ようとする事により、子どもの行動すべてに意味があるのではないかと考えるようになった。そしてそれを理解しようと子どもの思いに寄り添おうとするようになった。
- ・一人の子どもを記録しようと追っていても、その子どもだけでなく他の子どもに対しての見方も変化していることを実感した。
- ・保護者の表情が明るくなり笑顔を多く目にするようになった。

私達教職員自身の「子ども観」と「保育観」が少しずつだが変化しているように思う。今まで教育課程と照らし合わせながら「保育者の思った方向に導こうとしていた保育」から「子どもに寄り添った保育」へと変わっているように感じられる。

5 研究成果の活用（保護者との連携，学生への指導）

私達が本研究を通して感じた「子どもを良さの視点で見取ること」の意味について、保護者、または本園で学ぶ長崎大学の学生、特に教育実習の副免・主免実習に訪れる学生へ還元している。保護者へは育友会全体会における園長講話、毎日の降園時・学級懇談会での担任の話、個人面談、週報（学級通信）の中で伝えている。教育実習生へは実習初日に研究主任が「子どもの良さに注目しながら保育をすること」について話をするにしている。



学生への講話

2学期には1か月間の主免実習の学生が本園へと訪れた。実習生達は毎日、保育を観察・記録し、それらをまとめた日録を担任へ提出する。子どもの観察記録の欄を見ると、実習生なりに子どもの良さを見いだし、理解しようとする姿が見られた。感想にも

- ・私自身も子どもとのかかわりを通して成長することができ、以前よりも良さの視点から物事を考える事ができるようになった気がする。
- ・今までの自分を振り返ってみると、人の悪いところが目につき気になっていた。しかし、良さの視点で子どもたちを観察するようになってからは、子どもたち一人一人の良さをもっと知りたいと思い、保育についてもどうすればよいかと考えるようになった。良さの視点で人を見つめていくことは今後も自分自身大切にしていきたいと思う。

とあった。毎日の担任を交えたクラス協議会でも子どもを肯定的に見ようとする学生の姿が多々見られたことは喜ばしいことであった。

6 今後の取組に向けて

長崎大学教育学部附属幼稚園 園長 元田 美智子

平成24年11月2日、本園研究協議会（研究2年次）を開催した際のエピソードである。ある保育所の園長先生が御来賓の先生方を交えた中で、「長崎大学教育学部附属幼稚園の研究テーマ、取組は、とてもいいですね。参加してみて、感動しました。このような研究に取り組んでいただけたら保育所も参考になります」と語り始めたのである。保育所と幼稚園では、制度面から捉えてみると隔たりがある。しかし、教育の対象が「幼児期の子ども」ということについては共通である。保育所と幼稚園で、遊びを通して育まれている子どもの学びをより探求し、ささやかではあるが本園の研究を発信できたらと考えている。

そこで、今後（平成25年度以降）、研究をより深化した取組にするため、以下のような視点での取組の蓄積を図りたい。

(1) 子どものよさに注目した更なる保育改善

保育者の子どもたちの捉え方が変わりつつある。かつて、限られた場面ではあったが、保育者の思いがやや先行しがちな保育になることもあった。「事前に準備した遊びを子どもたちに経験させたい」という保育者の強い思いと子どもの思いにズレが生じていることに対して、客観的な把握ができていなかったということである。ところが、本研究を進めるに伴い、保育者の保育の在り方に変化が起きている。保育場面においてどの保育者も子どもの思いが今どこにあるのかをより尊重するようになってきつつある。「この子にはこのような言葉かけ」「チャレンジ心旺盛なあの子には、この環境構成」と、子どもたち一人一人の姿を思い浮かべ、楽しそうに次時の保育を考えている。保育者の観察記録、分析における発言も変わりつつある。「あの子の遊びの発想力はすごいです。あの子の発想を超えた環境構成が思い浮かばなくて……。とても難しいのです。あの子に私はたくさんのかんことを教わっています。」より、子どもの心に寄り添った次時の保育改善（環境構成・言葉かけなど）は、嬉しいことである。このような動きの広がりを期待したい。また、抽出児のケースによっては、教育学部の先生方及び附属特別支援学校の先生方との連携を深めながら適切な援助を心がけたい。

(2) 幼・小連携（長期）による子どもの観察記録、分析を通しての実証の蓄積

年中、年長と本園に在籍し、今年度附属小学校へと進学した1年生児童の観察記録を行っている。よさの視点に立った肯定的な幼児理解のもとでの保育で学んだ子どもが小学校での教育の場でどのような学びの姿に変容しているのか、観察記録したものを長崎大学教育学部井口教授、小西准教授、本園職員の複数で分析を行っている。しかし、実証している事例が1例と限られたものとなっている。そこで、平成25年度は、幼稚園において抽出観察している子どもの進学先である附属小学校においても複数名追跡し、観察記録、分析を行う予定である。幼児期において芽生えた学びの意欲が小学校での学びにどのように反映されているのか実証していきたい。その中で研究テーマ「小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求」に更に迫りたい。

(3) 事前指導・教育実習・事後指導に活かす

学部教育では、附属学校・園と連携し、教員養成においてコア的役割をもつ教育実習を通して、学生の教育的実践力を高めるようにしている。

子ども一人一人の「よさの把握（幼児理解）」は、幼児教育の主課題そのものである。事前指導において、子ども理解、教育課程の編成、実技指導、よさに注目した観察記録に基づいた指導案作成（演習）等を行う。また、教育実習においても、子どものよさに注目した保育実践、実習協議会を通して今まで以上に子

も理解を進め、幼児観察や実習協議会をより活性化するなど、学生の専門性を高めたい。

研究テーマ「小学校以降の学びを見通した幼児の学びの意欲の探求」についてぼんやりではあるが、可視化されつつある。平成 25 年度は、平成 23 年度から始めた本研究のまとめを考えている。

参考文献・資料

中央教育審議会（2005）

「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」 文部科学省

福島大学附属幼稚園（2011）『子どもの心が見えてきた』ひとなる書房